



学校だより

12月号

平成30年11月30日
横浜市立屏風浦小学校

校長 海老原 眞

「実りを糧に」

副校長 田島 良子

「子どもたちの可愛らしいお店やさんや、演奏、ゲームはどうでしたか？楽しんでもらえましたか？おうちでも、たくさん話をして、ほめてあげてください。」

「特に音楽会での歌はキラキラと輝いた笑顔で、大きく口を開け、気持ちをこめて歌う姿に鳥肌が立ちました。」

土曜参観と屏風浦コンサートの後、若い教員たちは学級だよりにこう記しました。子どもたちの成長を大きく感じ、実りの秋を迎えたこと、本当にうれしく思います。

また、同日に開催された学校運営協議会でも、「防災教育やキャリア教育に、地域に住む方の力をもっと借りたらいい。」「小学生も高学年となれば、地域の援護者として十分に期待できる。」といった意見も出されました。

この日は、鍵がかかっていることの多い屏風浦小学校歴史資料館の活用を新しく考えようと、朝から地域の方が開館してくださったこともあり、まさしく「社会に開かれた教育課程の実現」に向けて、これからの屏風浦小学校の展望を抱く一日ともなり、心強さを感じました。ありがとうございました。

さて、12月は人権週間から始まります。数年前になりますが、作家の落合恵子さんは、中学生の人権作文コンクールで次のように講評されていました。

差別意識（あるいは差別そのもの）の解消は、そこに「壁」が存在することに気づくこと、あると認識することから、すべては始まります。壁の存在に気づかないことはそのまま無意識であっても壁を認めることになるのですから。この気づきの瞬間はとても大事なものです。そして残念なことに多くの大人は、壁に慣れてしまったか、堅牢な壁の厚さに圧倒され、「どうせ」を迎え入れてしまっているのかもしれない。けれど、失望しないでください。決して多数とは言えないかもしれませんが、なんとか差別という壁を倒そうと踏ん張っている大人もいるのですから。そこに壁があったら、「しかたないや」と引き返すか、力をこめて倒す努力をするかで、人生の景色は確実に変わるものだとはわたしは確信しています。大事なことは壁に気づく想像力を育むこと。壁から逃げるのではなく、「倒すための努力」を絶え間なくし続けることでしよう。この、長く熱い努力の過程こそ、まずは大事にしたいと思います。

この落合さんの言う「壁」に気付くように感性を磨き、想像力を育み、子どもや保護者の心に最後まで寄り添う覚悟をもつ私たちでありたいと願ってやみません。子どもたちとともに、私たち職員も研修につとめ平成30年を締めくくりたいと思います。